

4) 極小未熟児の言語発達

研究協力者 宮尾益知¹
共同研究者 桑田悦子² 美濃厚子²

1、極小未熟児の一般的交信行動の発達

重度な精神学的後遺症を免れた極小未熟児の長期予後の視点から、伝達行動の発達の特徴を明らかにするために、普通乳幼児の伝達行動の発達と比較して若干の検討を行った。

対象児は、現在経過観察中の特に大きな問題のない未熟児（1歳4カ月～2歳10カ月）15名および、保育所入所児（7カ月～2歳9カ月）21名に対して、伝達行動の質問紙および津守・稲毛式乳幼児発達質問紙への記入方法を用いた。

結果は、発達指数は未熟児群平均92、SD12.1、普通児群107、SD19.7であり、遅れが認められ、従来の報告と同様であった。

伝達行動の発達については、普通児群ではC A14カ月以上、D A15カ月以上、D Aの上昇とともに種々の伝達様式を21～22カ月までに獲得し、その後に、徐々に言葉優位に使用される。他方未熟児群は、修正年齢で普通児群と比較すると、D

A14カ月以上の児に概ね同様な発達傾向を示すが、伝達様式の獲得時期やその使用期間等、個人差がみられた。

初語の出現時期については、普通児群は8～10カ月に集中して出現するが、未熟児群は、8～16カ月の間にばらつき、出現が定かでないものもあった。

人見知りの出現時期については、8～10カ月の間が多く、未熟児群の出現時期は、初語のそれと同様に幅がみられた。

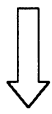
伝達行動、他児との関係、事物操作の発達の傾向を比較してみると、普通児群は暦年齢に応じて、いずれの発達のちらばりも同様な傾向を示したが、未熟児群では、特に他児との関係の発達の遅れが顕著に認められた。

結論として、未熟児の伝達行動の発達は、初期の対人関係や言語獲得の遅れやもたつきにより、その後の伝達行動の種々の様式の獲得や使用期間に影響をもたらしているのではないかと推察した。

1 自治医大小児科
2 駿河台日大病院スピーチクリニックST
3 自治医大リハビリ科ST



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



重度な精神学的後遺症を免れた極小未熟児の長期予後の視点から・伝達行動の発達的特徴を明らかにするために・普通乳幼児の伝達行動の発達と比較して若干の検討を行った。